

# ドイツ語 werden 受動はどのように日本語に訳されるのか — F. Kafka *Die Verwandlung* の 2 種類の翻訳を材料に —

柳 武 司

## 1. はじめに

ドイツ語受動文を日本語に訳す際に受動を用いた表現にすると不自然になることがよく知られている。成田（1996）は、以下の用例を用いてこの問題を指摘している<sup>1)</sup>。

1a) Petra: Werden die Schuhe noch getragen?

Frau Müller: Ja, aber sie müssen geputzt werden.

1b) ? この靴はまだはかれるの。— ? うん、でも磨かれないといけない。

2a) Das Paar bezog eine gemeinsame Wohnung. Auch ein Auto wurde gekauft.

2b) ? 車も一台買われた。

上記用例で挙げられているように、ドイツ語の受動文を日本語に翻訳する際に不自然な表現になる場合、特に文学作品を日本語に翻訳する場合には、そのまま「られる」<sup>2)</sup>形式を避けることが当然であろう。一般に外国語を翻訳する際には、直訳と意訳に大別され、河原（2014）では、ヴィネイ、J. とダルベルネ、J. の *Stylistique compare du français et de l'anglais* (Vinay & Darbelnet, 1958) を引用し、一般的な「翻訳ストラテジー」として以下を挙げている<sup>3)</sup>。

### 直接的翻訳

- (1) 借用：起点言語の言葉がそのまま目標言語に転移される。
- (2) 語義借用：起点言語の表現や構造が直訳によって転移される。
- (3) 直訳：逐語訳のことである。

### 間接的翻訳

- (4) 転位：品詞転換のことである。義務的転位と選択的転位がある。
- (5) 調整：起点言語の意味と視点を変えるもので、直訳や転位が目標言

語において不適切で慣用的でなくぎごちない場合にこれが正当化される。義務的調整と選択的調整がある。

- (6) 等価：同一の状況を異なった文体的・構造的手段で訳すことである。イディオムやことわざの翻訳の場合に有効。
- (7) 翻案：起点文化のある状況が目標文化に存在しない場合、文化的言及対象を変えることである。

ドイツ語の受動文を日本語にする際には、受動で主語であった主格名詞を主語なしで助詞「を」付ける被動対象に変更するなどといった視点の変化が考えられ、上記の「(5) 調整」に該当するのであろう。その際には訳者の解釈や表現の仕方によって複数の可能性があることは、西嶋（1994）が以下の様に報告している<sup>4)</sup>。

ところで、一般に、「文学作品」と呼ばれるテキストを翻訳する際には、解釈という問題がかかわってくる。「文学作品」は複数の解釈（読み）を許容することがあり、それを翻訳するにはテキストを語学的に正確に理解したうえで、その複数の可能な解釈から一つの解釈を選択していることが前提になっているからである。もし解釈の違いが翻訳に反映されるとしたら、それはどのように、どの程度反映されるのか、あるいは反映されるべきなのか。

この後西嶋はカフカの „Die Bäume“ を利用し、分析の枠組みを設定して、上記問題を同一訳者のものを含めて20例の日本語訳を考察している。本論文に於いても訳文を対象とするものであるが、ある程度の数の受動文の生起が見込まれる短編を対象として、訳者による翻訳の仕方、特に個別の傾向があるのかを確認したい。対象としては、Franz Kafka *Die Verwandlung* 中にある werden 受動文を翻訳した文を対象として、主語の有情性、翻訳後の動詞の種別などを分類して集計し、その結果を考察する。この作家を選んだ理由は、「カフカは、その一見人格個性を欠いた情け容赦のない言語表現に、自分自身を完全に投入した」<sup>5)</sup> と評されており、そこで用いられるドイツ語受動文がどのように日本語に翻訳されるのか興味を惹かれたからである。

今回の集計の対象とした訳本を二冊に限ったことについて述べると、この作品の翻訳は他に多数あるという指摘を受けるが、werden 受動を翻訳する際に訳者によって明確な傾向が見られるのかをまずは限定して確認するためである。なお、後述するが受動文を「もらう」に訳している箇所については、他の訳書も参考とする。

## 2. 「受動」の定義

形式的な定義として、まず日独間の「受動」の定義を確認する。

### 2.1 ドイツ語

DUDEN の文法書では以下の様に定義されている<sup>6)</sup>。

„Passivformen werden mit einem Passivhilfsverb (werden, sein, bekommen) und dem Partizip II eines Vollverbs gebildet. Beispiele (im Infinitiv) sind *gefunden werden* (werden-Passiv von finden), *erzählt bekommen* (bekommen-Passiv von erzählen) und *geöffnet sein* (sein-Passiv von öffnen). “  
「受動形は、受動の助動詞 (werden, sein, bekommen) と本動詞の過去分詞によって形成される。例 (不定詞) に *gefunden werden* (finden の werden 受動), *erzählt bekommen* (erzählen の bekommen 受動), そして *geöffnet sein* (öffnen の sein 受動) がある。」

ドイツ語の受動 „Passiv“ の定義は、特定の助動詞と過去分詞が結びつく構文で一貫しており、これは Engel<sup>7)</sup> や Helbig<sup>8)</sup> など他のドイツ語文法に関する文献でも同様である<sup>9)</sup>。

### 2.2 日本語

日本語の「受動」に関しては、以下の村松 (1996) を参照する<sup>10)</sup>。

「ある事物が動作の表す動詞の影響を受ける。  
形態としては助動詞『られる』『れる』をつけたもの。

(1) 直接の利害を表すもの。

『彼はみなから (に) 愛される。』

- (2) 間接の利害を表すもの。

『彼は子供に泣かれて一晩中ねむれなかった。』

- (3) いわゆる非情の受け身

『犯罪が当局によって摘発される。』

村松の記述によれば、「受動」は助動詞「られる」「れる」を付けた形式とされ、これはドイツにおける日本語教育でも一般的な受動形の説明として用いられている<sup>11)</sup>。しかし、「られる」の形式は、受動以外の意味も表すことが知られており、川村(2012)は「られる」の用法として<sup>12)</sup>、受身用法「太郎が次郎に助けられた」、自発用法「故郷のことが懐かしく思い出される」、可能用法「次郎はブルーチーズが食べられる」、尊敬用法「山田先生が大阪へ出かけられる」の4つを挙げており、受動的な意味を表すのみのドイツ語 „Passiv“ とは異なる。

### 3. 調査と抽出結果

作品中にある werden 受動を今回の調査対象にしたのは、採取の際に量的に一定量の生起数が見込まれるため、まずは werden 受動を最初の調査対象とする。

#### 3.1 方法と手順

以下の(1)から(4)の手順でコーパスから werden 受動を抽出して集計した。

- (1) データコーパスを利用して対象作品中にある werden と過去分詞が結びつく文を抽出する。コーパスはテキストファイルとし、そのデータを Excel の VBA によって対象となる文の抽出処理を自動化する。
- (2) 抽出したドイツ語に対応する翻訳 2 冊の訳文を Excel 表中に横列に併記する。
- (3) 訳文の主語及び動詞の種別を以下の基準で判別する。
  - a) 主語の種類  
有情物…感情を持つもの(大抵は人間)  
非情物…感情のないもの(物あるいは事柄, dass 文などを含む)
  - b) 動詞の判別

受動文…「れる・られる」による文

能動文…上記以外の文で、能動文の場合は更に被動対象を表す助詞「を」がある文を「他動詞」とし、そうでない文を「自動詞」とした。

(4) 判別した結果を集計して数量と百分率を表にまとめる。

### 3.2 集計結果

作品全体では、werden 受動数が 55 文で、有情物の主語が 11 文、非情物の主語が 44 文となった。受動の全体的な割合は、ピリオドが 650 個なので、ピリオドの数を文の区切りとした場合  $650 \div 55$  で、全体の約 8.5% に werden 受動が見られる<sup>13)</sup>。

訳者別の主語と動詞の種別を基準に分類した集計結果を以下の表にした。百分率は小数点第二位を四捨五入した。また、表中の「有情物」「非情物」の下にある百分率「%」は、一番左の数量に対する割合である。例えば原田訳の受動が 29 個は、有情物が  $5 \div 29 = 17.2\%$  となる。

表 1 原田訳

	原田訳		有情物		非情物	
	個数	%	個数	%	個数	%
受動	29	52.7%	5	17.2%	24	82.8%
他動詞	16	29.1%	5	31.3%	11	68.8%
自動詞	8	14.5%	1	12.5%	7	87.5%
もらう	2	3.6%	0	0.0%	2	100.0%
	55		11	20.0%	44	80.0%

表 2 中井訳

	中井訳		有情物		非情物	
	個数	%	個数	%	個数	%
受動	17	30.9%	1	5.9%	16	94.1%
他動詞	24	43.6%	7	29.2%	17	70.8%
自動詞	12	21.8%	2	16.7%	10	83.3%
もらう	2	3.6%	1	50.0%	1	50.0%
	55		11	20.0%	44	80.0%

集計結果を比較すると、原田訳は、ドイツ語の受動文を半分以上訳文で「られる」型の受動にしている。これに対し、中井訳は、三分の一未満しか受動を「られる」の訳語にしておらず、他動詞に最も多く変えて訳している。また、いずれの訳者も「もらう」に訳した文が2箇所あった。

### 3.3 用例の分析

作品中の werden 受動のうち、筆者が考察する上で有益と判断した最小限の用例を抜粋する。ドイツ語受動文が訳語になって「られる」による受動になったのか、あるいは他動詞や自動詞になったのか、といった区別を「受動→(訳語の動詞の種類)」の形で表した。このパターンは3つになるが、更に主語が人間か、身体か、非情物か、そして「もらう」という観点を加えて8つの類型に分類し、分析を記した<sup>14)</sup>。

受動→受動・主語=有情物<sup>15)</sup>

用例1) Und mehr infolge der Erregung, in welche Gregor durch diese Überlegungen versetzt wurde, als infolge eines richtigen Entschlusses, schwang er sich mit aller Macht aus dem Bett. (S.125)<sup>16)</sup>

原田：「ほんとうに決心がついたためというよりも、むしろこうしたもの思いによって置かれた興奮のために、グレゴールは力いっぱいベッドから跳び下りた。(位置 No.151)<sup>17)</sup>」(受)

中井：「まっとうな決心のあげくというよりも、こんなことを考えていた間にひきおこされた異常な興奮のために無我夢中になって、精一杯力をこめてグレゴールはベッドから跳び降りた。(18頁)<sup>18)</sup>」(受)

原田訳と中井訳のいずれもが「られる」で訳した唯一の用例である。ただし、原文では主語が有情物である Gregor が、訳文では異なっている。詳しくは考察で述べる。

受動→原田訳は受動、中井訳は受動にならない

用例2) ... das Dienstmädchen wurde von der Schwester mit irgendeiner Besorgung weggeschickt. (S.149)

原田：「女中は妹から何か用事を言いつけられて使いに出される。(位置

No.479)」(受)

中井：「女中のほうはいつも妹のいいつけで何か買いたしに出かけることになっていた。(48頁)」(自)

用例3) ... , wo er sich, trotzdem sein Rücken ein wenig gedrückt wurde und trotzdem er den Kopf nicht mehr erheben konnte, gleich sehr behaglich fühlte... (S.145)

原田：「そこでは、背中が少し抑えつけられるし、頭をもうもたげることができないにもかかわらず、すぐひどく居心地がよいように思われた。(位置 No.431)」(受)

中井：「すこし背のあたりが窮屈で、頭をもちあげることもできかねたが、居心地だけはとてもよかった。(44頁)」(自)

用例4) Aber wegen dieser kleinen Unhöflichkeit, für die sich ja später leicht eine passende Ausrede finden würde, konnte Gregor doch nicht gut sofort weggeschickt werden. (S.128)

原田：「だが、あとになれば適当な口実がたやすく見つかるはずのこんなちょっとした無礼なふるまいのために、グレゴールがすぐに店から追い払われるなどということはありません。(位置 No.191)」(受)

中井：「また後になればうまい言い訳ができるだろうさ。—すぐに自分を解雇したりできるもんか。(22頁)」(他)

原田訳はすべて「られる」での訳語になっているが、中井訳は用例2)と3)が自動詞、用例4)が他動詞に変えられている。主語は用例2)と4)が有情物である人、3)が身体である。人が主語であると、原田訳の2)には、被害のニュアンスが含まれるように思われる。また身体が主語の用例3)でも原田訳は望まぬ状態が表されているように思われる。中井訳を確認すると、自動詞にした2)は自分から出かけるように思われ、3)の「窮屈で」は単に押さえつけられているというだけではなく、マイナスのイメージも含まれるように思われる。4)の他動詞に変えた訳では、支配人が意図を持って Gregor を解雇するニュアンスが含まれるように思われる。

受動 → 受動・主語 = 非情物

用例 5) Spät erst in der Nacht wurde das Licht im Wohnzimmer ausgelöscht,...<sup>19)</sup>  
(S.145)

原田：「夜遅くなってからやっと、居間の明りが消された(位置No.424)」(受)

中井：「夜おそくなってから、居間の灯がようやく消された(43頁)」(受)

非情物が主語で感情がないために、訳文で受動のままでも自然な表現として受け取れる。松村(1996)のいう「非情の受け身」に該当する。

受動 → 他動詞・主語 = 有情物(人間)

用例 6) Der Prokurist musste gehalten, beruhigt, überzeugt und schließlich gewonnen werden;... (S.138)

原田：「支配人を引きとめ、なだめ、確信させ、最後には味方にしなければ  
ならない(位置No.327)」(他)

中井：「なんとかして支配人を引きとめ、まず興奮をしずめて、自信を取り  
もどさせたあげくに、くどきおとさなくちゃならないのだ(35頁)」  
(他)

受動態が4つ連続して用いられた用例である。ドイツ語の主語が人間なので、訳文では受動にせず主語を示さない他動詞にしているが、日本語訳は主語がGregorになり、あたかもGregorが焦っている感じにならないだろうか。

受動 → 自動詞・主語 = 有情物(人間)

用例 7) ... der Vater war natürlich aus seinem Sessel aufgeschreckt worden ...  
(S.178)

原田：「父親はむろん安楽椅子からびっくりして跳ね起きたのだった(位置  
No.874)」(自)

中井：「父のほうはびっくりして、例の安楽椅子からはね起きた(83頁)」(自)

受動から自動詞に訳され、この動作が他者から為された行為であることが消失し、主語が驚き、意思を持って急いで起き上がった、とも受け取ら



れないか。

受動 → 他動詞・主語 = 有情物（身体）

用例 8) ... denn wenn er sich schließlich so fallen ließ, musste geradezu ein Wunder geschehen, wenn *der Kopf* nicht **verletzt werden** sollte. (S.122)

原田：「…というのは、こうやって最後に身体を下へ落してしまうと、頭を傷つけまいとするならば奇蹟でも起こらなければいけないものではない。(位置 No.106)」(他)

中井：「…もしそんな姿勢でベッドから落っこちたとしたら、頭に怪我をしないのが奇蹟なくらいに思われたからだ。(14 頁)」(他)

用例 7) は人間が主語のために自動詞として意思を持って変化したことを表しているが、用例 8) では身体が主語になるので、いずれも主語を省いて他動詞にしている。原田訳は主語が意思を持って傷つけないようにしする意味合いが感じられる。

受動 → 自動詞・主語 = 有情物（身体）

用例 9) ... dass *sein Körper* zu breit war, um vollständig unter dem Kanapee **untergebracht zu werden**. (S.145)

原田：「ただ、身体の幅が広すぎて、ソファの下にすっぽり入ることができないのが残念だった。(位置 No.424)」(自)

中井：「ただ身幅がひろすぎて、長椅子の下へ全身すっぽりはいりこんでしまえないのが残念といえば残念だ。(44 頁)」(自)

用例 8) と同様に身体が主語であるが、身体を持ち主を主語として自動詞として翻訳した用例<sup>20)</sup>。訳語では主語の意思が感じられる。

受動から「もらえる」にした用例

原田訳と中井訳で、受動文を「られる」と「もらう」に分かれた用例がある。訳が分かれたので、他の訳も参照する。

用例 10) Und ohne daran zu denken, dass er seine gegenwärtigen Fähigkeiten, sich zu bewegen, noch gar nicht kannte, ohne auch daran zu denken, dass

seine Rede möglicher- ja wahrscheinlicherwise wieder nicht verstanden worden war, verließ er den Türflügel; (S.138)

原田：「そこで、身体を動かす自分の現在の能力がどのくらいあるかもまだ全然わからないということを忘れ、また自分の話はおそらくは今度もきっと相手に聞き取ってはもらえないだろうということも忘れて、ドア板から離れ、開いている戸口を通して身体をずらしていき、支配人のところへいこうとした。(位置 No.323)」(もらう)

中井：「自分の現在の行動能力のことも、またたぶん、自分の言葉がもう相手に二度と理解されそうにないことも考えてみようともせずに、いきなり彼はドアの羽目板からとびはなれて、ドアの隙間から這い出た。(35 頁)」(受)

池内<sup>21)</sup>：「いま自分には動く能力がどれほどあるかわからないにもかかわらず、さらにまた、もしかすると、いや、たぶんに自分の言葉が理解させてもらえないことも考えず、寄りかかっていた扉をはなれ、開いたところから身を押し出すようにして支配人の方へ向かおうとした。(34 頁)」(もらう)

丘沢<sup>22)</sup>：「自分の現在の運動能力がまったくわかっていない、ということを考えず、それどころか自分の演説がもしかしたら、いや、おそらく理解されなかったのではないか、ということすら考えずに、もたれかかっていたドアから離れ、開いているドアを通して、マネージャーのところへ行こうとした。(58 頁)」(受)

用例 11) Er (Gregor) hielt inne und sah sich um. Seine gute Absicht schien erkannt worden zu sein; (S.192)

原田：「彼はじっととまって、あたりを見廻した。彼の善意はみとめられたようだった。(位置 No.1055)」(受)

中井：「彼は動くのをやめて、周囲を見まわした。彼の他意のない目的はどうやらわかってもらえたようだ。(100 頁)」(もらう)

池内：「それから動きをやめて、まわりを見た。こちらの心づもりがわかってもらえたらしい。(96 頁)」(もらう)

丘沢：「グレゴールは動くのをやめて、まわりを見まわした。悪意のないことは認めてもらえたらしい。(119 頁)」(もらう)

受動文が「もらう」に翻訳された用例で、中井訳も原田訳もいずれも2箇所ずつあるが、同一の文を「もらう」にした箇所はなく、別々の箇所で「もらう」にしている。用例10)は、「もらう」と受動とが半数ずつに分かれ、用例11)は中井訳と池内訳、丘沢訳が「もらう」で受動よりも多数になっている。

### 3.4 考察

*Die Verwandlung* の翻訳2冊を確認したところ、成田(1996)が述べているように、「られる」で訳すと不自然になるために訳文で受動にしている用例が確認された。ドイツ語から日本語に訳する際の類型に関して述べると、以下の様になる。

#### (1) 受動から受動

村松の「非情の受け身」に該当する用法でこれまで言われていることの再認である。原文で有情物である Gregor が主語になり、訳語を受動にした唯一の文である用例1)でも、意識されて非情物が主語に置き換えられて翻訳され、予想通りの結果となった。

#### (2) 受動から他動詞

用例4)の中井訳と用例6)及び8)が該当する。日本語では主語が必須ではないので、主語のない他動詞にしても比較的違和感のない訳文になっていると思われる。

#### (3) 受動から自動詞

用例7)と9)及び中井訳の2)と3)が該当する。受動との違いとして取り上げるとすると、有情物である Vater が主語の用例7)では、父親がびっくりして「跳ね起きた」では、意思を持って急いで起き上がったともとれないだろうか。

#### (4) 「もらう」の訳文

動詞の影響を被る側の視点から「られる」にするか「もらう」にするかは、出来事としては同じ事柄でも受け取る印象が異なる。例えば、ある人物の父親が話者を褒める行為をした場合、「私は父親に褒められた」と「私は父親に褒めてもらった」のいずれでも表現可能であろう。これは客観的な区別ではなく、心理的な要因に言及し、ドイツ語と日本語の受動文の意味の違いの理由について述べている成田の記述がこの区別を理解する手助

けになる<sup>23)</sup>。

「ここまでの考察から、ドイツ語の受動文と日本語の受動文の意味の根本的な違いについての解釈をまとめると次のようになる。

ドイツ語の受動文は『中立的な立場から出来事を見る』が『どの部分に焦点を合せて出来事を描くか』という点で能動文と異なる。日本語の受動文は、客観的な叙述（例：1947年に新憲法が施行された）や属性の叙述（例：この新聞はサラリーマンに広く読まれている）のように『心理的接近』が問題にならない場合ももちろん少なくないが、基本的には『出来事から直接間接に影響を受ける人物に心理的に接近して』その出来事を描く。『出来事のどの部分に焦点を合わせるか』はドイツ語ほど決定的ではない。」

日本語の受動文の場合「出来事から直接間接に影響を受ける人物に心理的に接近して」いるために、その人物の利益になる場合に「もらう」を選択し、そうでない場合は「られる」あるいは能動にするのではないだろうか。訳文では、ドイツ語の受動文を「もらう」と訳した箇所が原田訳と中井訳のいずれも2例ずつ見られた。動作としては同一の事柄を表しているにもかかわらず、文脈上からそれぞれの訳者が「直接間接に影響を受ける人物」に利益になるかどうかを判断して翻訳したものと推測され、訳者の解釈によって訳が分かれる結果となった。10)と11)の用例に限っては4つの訳文を確認したが、10)が受動として「られる」で訳されることが多いのは、*verstanden worden*の前に否定を表す *nicht* があり、Gregorの利益にならない場面である。11)では逆に利益になる状況なのでより多くの訳者が「もらう」を選んだのではないだろうか。

#### 4. おわりに

カフカのドイツ語原文では、ドイツ語の受動が「中立的な立場から出来事を見る」用法なので、物語が淡々と語られているが、少数ではあるが主語の意思や利害が入り込む翻訳が見られた。「られる」を用いる頻度としては、中井訳は原田訳に比べて60%未満で、受動を訳する際の訳者傾向が見られた。また、用例10)と11)に見られる様と同じ受動文が「られる」と「もらう」に分かれることから、訳者が異なれば解釈とそれに伴う選択

語彙も異なる。利害関係の意味合いを表す「もらう」を使用することには、「一見人格個性を欠いた情け容赦のない言語表現」<sup>24)</sup>を訳す際に、かなりの慎重さが必要だろう。河原(2014)の示す用語によると、ドイツ語受動文をそのまま「られる」形式で訳せないのは「隷属」にあたり、時代的な表現の違いや「られる」や「もらう」にする任意の語彙を選ぶことは「選択」となり、特に後者が文体研究の対象となり得よう<sup>25)</sup>。

「隷属(2つの言語体系の違いによる義務的な転位と調整)と、選択(翻訳者のスタイルや選好による非義務的な変更)」という重要なパラメーターを説明し、選択という文体論の領域こそ翻訳者の主要な関心事であるとした。従って翻訳者の役割は『使える選択肢の中から選択して、メッセージのニュアンスを表現する』こととなる。」

結果として、訳文は1950年代と現代では変化して当然であり、また、訳者による解釈で生じる語彙及び統語的な選択があるため、正解の翻訳というものが存在しないことになる。今後、受動文の翻訳を対象に調査を進めるとしたら、ドイツ語で受動文を「もらう」に訳している用例を収集し、主語の種別や否定を表す語との共起成分あるいは文脈から読み取れる利害関係などを対象として調査、分析することに注目したい。また、前出した「私は父親に褒められる」と「私は父親に褒めてもらう」の違いをドイツ語でどの様に翻訳するのか、といった日本語からドイツ語にする際に利害のニュアンスをどう表現するかも今後の課題になり得る。

## 参考文献

- Duden (2009): Die Grammatik. Hrsg. von Dudenredaktion. 8. Aufl. Berlin.
- Engel, U. (1988): Deutsche Grammatik. Heidelberg.
- Helbig, B./Buscha, J. (1996): Deutsche Grammatik. 17. Aufl. Leipzig.
- 川村大 (2012): ラル形述語文の研究. (くろしお出版)
- 河原清志 (2014): 翻訳ストラテジー論の批判的考察. [『翻訳研究への招待』 No. 12. 121-140 頁. 日本通訳翻訳学会発行 electronic journal]
- マルティエーニ, フリッツ: ドイツ文学史-原初から現代まで- 高木実・尾崎盛

影・齋田光行・山田広明訳. (三修社)

成田節 (1996): ドイツ語と日本語の受動態について [『ドイツ文学』 97 号 122-133 頁. 日本独文学会編]

日本国語大辞典 (1981): 尚学図書編集. (小学館)

西嶋義憲 (1994): 解釈—翻訳—翻訳文体論?: カフカのテキスト Die Bäume の日本語訳をめぐって [『広島ドイツ文学』 8 巻 45-61 頁. 広島独文学会]

松村明編 (1996): 日本文法大辞典. 12 版. (明治書院)

在問進 (1983): 受動態 (Passiv)」について. [『ドイツ文学』 71 号 46-54 頁. 日本独文学会編]

## データコーパス

Gutenberg-DE Edition 7. Das Literatur Archiv Internet-Dienste Hille & Partner GbR.

## 参照した翻訳

原田義人訳 青空文庫 <http://www.aozora.gr.jp> を参照. (「世界文学大系 58 カフカ 1960」筑摩書房を底本として) Kindle 版「変身 フランツ・カフカ 原田義人訳」も同一内容。

中井正文訳 角川書店 2019. (改版 25 版を参照。なお、初版は 1952 年)

## 注

- 1) 成田 (1996) 122 頁で日本語にする際に受動として適さない用例を抜粋。ドイツ語文 a) に対する和訳 b) も成田による。「?」や下線部も成田による。なお 2b) の下線部のみの和訳も成田による。
- 2) 「られる」と「れる」の両方を指すが、簡便さのため「られる」のみを記す。以降も同様。
- 3) 河原 (2014) 122-123 頁参照。
- 4) 西嶋 (1994) 45 頁参照。
- 5) マルティーニ (1979) 524 頁「フランツ・カフカ」の項を参照。
- 6) Duden (2009) S.543. Diathese より。イタリックは原文ママ。
- 7) Engel (1988) S.454-456. Passivformen und Parallelförmigen の項を参照。
- 8) Helbig/Buscha (1996) S.186-188. Konkurrenzformen des Passivs mit Modalfaktor

の項を参照。

- 9) sich lassen などで他の形式でも受動的な意味を持つ用例があるとされるが、過去分詞と werden が結びつく形式を受動とすることは広く認められており、本稿ではこれを扱う。
- 10) 村松 (1996) 321-323 頁「受動」より抜粋。元の引用符「」は『』に変更した。以降も引用では同様。
- 11) <https://www.scribd.com/document/338329349/Japanischkurs-pdf> (2019 年 6 月 1 日取得) PDF の 71 頁に „Passiv (Ukemikei) “があり、1. 通常の受け身 (normales Passiv) 「先生は私を怒る→私は先生に怒られる」、2. 一般的な表現 (Allgemeine Aussagen) 「日本で漢字が使われています」、3. 迷惑の受身 (Passiv des Leidens) 「私は家内に車を売られました」と記述されている。
- 12) 川村 (2012) 3 頁「一・一 本書の目的」参照。
- 13) ピリオドの区切りの中に2つ以上の文が含まれる場合の誤差は考慮しない。
- 14) 用例中の略記の仕方として。①動詞態は、訳文の後ろに区別を略記し、受動文は(受)、能動文で他動詞は(他)、自動詞は(自)とした。また、原文と訳文の受動に該当する部分はボールド・下線とした。②主語は、原文の主語は有情物と非情物を区別し、イタリック・下線にした。③訳書の区別は、原田訳は「原田:」、中井訳は「中井:」とした。
- 15) 下線を引いたのは見易さのため。
- 16) ドイツ語引用箇所は、Franz Kafka: *Drucke zu Lebzeiten*. Hrsg. von J. Born, G. Neumann, M. Pasley und J. Schillemeit. Frankfurt am Main. Fischer, 2002. のページ数を明記する。
- 17) 訳文のページに関して、原田訳は青空文庫の Kindle 版「変身 フランツ・カフカ 原田義人訳」の引用開始部の位置 No. を訳文末尾に (No. 位置数) の形式で記した。
- 18) 訳文のページに関して、中井訳は角川文庫のページ数を訳文末尾に (ページ数) の形式で記した。
- 19) ドイツ語用例は現代正書法で表記。
- 20) 原田訳は「入る」、中井訳は「はいりこんで」と訳が分かれたが、境界を意識するといわれる「…こむ」に関しては今回の対象外のため論じない。
- 21) 池内紀訳「カフカコレクション 変身」白水 U ブックス、2006。(白水社)

- 22) 丘沢静也訳「変身／おきての前で 他2編」2007. (光文社古典新訳文庫)
- 23) 成田 (1996) 129 頁「4. ドイツ語と日本語の受動文の相違」参照。元の引用符「 」は『 』に変更した。
- 24) 注5 参照。
- 25) 河原 (2014) 123 頁参照。